令　和　８　年　度
七飯町平和大使派遣事業報告書

「被爆 81 周年長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典」

七　飯　町

目　　次

1頁･･･　七飯町平和大使派遣について
七飯町長　　杉 原　　太

【事業報告書】
3頁･･･　七飯町平和大使派遣事業報告書
令和8年度七飯町平和大使派遣団
団 長　　花 巻　　亘

【レポート】
5頁･･･「　平和大使で学んだこと　」
大中山中学校　3年　　杉 田 篤 志

7頁･･･「　もう二度と起きてはいけない恐ろしい出来事　」
七 飯 中 学 校　3年　　三小田 瑠 杏

9頁･･･「　平和のために　」
大沼岳陽学校 9年　　土 屋 郁 乃

【参考資料】
11頁･･･　七飯町平和大使のあゆみ
14頁･･･　平和祈念祭「　平和への誓い　」
17頁･･･　長崎平和宣言

七飯町平和大使派遣について

七飯町長　杉　原　　太

七飯町平和大使派遣事業は、次代を担う中学生の平和教育の一環として、また、心豊かな人材を育成し、魅力ある地域づくりを実現するものとして、8月6日の広島市又は8月9日の長崎市において行なわれている平和式典に、平成14年度から平和大使を派遣してまいりました。

開始当初は毎年広島市を訪れていたこの平和大使派遣事業ですが、平成19年度からは長崎市と広島市を交互に訪れており、今年は8度目の長崎市派遣であります。

平和大使のみなさまには、原爆死没者の慰霊と世界平和の実現を祈る、長崎市の平和祈念式典に参列していただき、原爆資料館などで当時のことから核のもたらす影響まで感じながら学びとる貴重な機会となっております。

81回目の原爆の日に行われた式典には、被爆者や遺族ら約2，600人が参列するとともに、国際連合等国際機関、98の国と欧州連合の代表も出席し、犠牲者の冥福と世界の平和を祈りました。

長崎市長の平和宣言では、被爆者の体験談を引用し、核兵器は「必要悪」ではなく「絶対悪」であり、人類と核兵器は決して共存できない。また、「平和の原点は、人間（ひと）の痛みがわかる心をもつこと。」とし、すべての国の指導者に『国連憲章の理念に基づく多国間主義と「法の支配」を早急に取り戻すこと、人間の尊厳と基本的人権を守り、国際協調を通じて恒久平和と人類共通の繁栄を実現するという国連創設時の精神に

立ち返ってください。』と呼び掛けました。

一発の原子爆弾により、一瞬にして街は焦土と化し、7万ともいわれる貴い命が失われ、人々の夢や明るい未来が容赦なく奪われ、一命をとりとめた方々にも、筆舌に尽くし難い苦難の日々をもたらした、唯一の戦争被爆国として、「核兵器のない世界」の実現に向けた努力をたゆまず続けること。これは、令和の時代においても、変わることはありません。

核兵器の非人道性を、世代や国境を越えて伝え続ける務めとして、被爆者の方々から伝えられた被爆体験を、しっかりと若い世代へと語り継ぎ、被爆の悲惨な実相に触れることで、平和への道を着実に推し進め、次世代の人々にも原爆のもたらす恐ろしさ悲惨さを理解してもらい、今後も平和と核廃絶への取り組みを推進し、今を生きる私たちがより多くの人々に平和への訴えを続けていく決意を新たにするところであります。

結びに当たり、本報告書が多くの方々の目に触れ、世界恒久平和の実現と核兵器廃絶への取り組みがより一層推進されることを心より祈念し、今一度、犠牲となられた数多くの方々の御霊(みたま)に対し、謹んで、哀悼の誠を捧(ささ)げます。

【事業報告書】

七飯町平和大使派遣事業報告書

生涯教育課長　花　巻　　亘

はじめに、今回の平和大使結団式の前日である令和8年7月 28 日に「令和8年熊本地震」が発生いたしました。多くの尊い命が失われ、今もたくさんの方々が避難生活を余儀なくされています。犠牲となられた方々のご冥福を心からお祈り申し上げますとともに、被災された皆様に心よりお見舞い申し上げます。また、長崎市も震度４の揺れに見舞われる大変な状況の中、厳粛に式典を挙行された関係者の皆様に深く敬意を表します。

昭和 20 年8月9日、長崎市松山町上空で原子爆弾が炸裂し、今も続く甚大な被害をもたらしました。私はこれまで、その事実を書籍やニュースなどを通じて知識としては知っているつもりでした。しかし今回、初めて被爆地・長崎を訪問し平和祈念式典に参列したことで、その知識がいかに浅薄なものであったかを痛感いたしました。

結団式で私は平和大使の皆さんに「現在も世界中で起こっている戦争の行き着く先に何があるのかをその目で確かめ、被爆者の思いを受け止めて自分の言葉で伝えられるようになってほしい」と挨拶しました。しかし私自身、連日報道される現在進行形の戦争や紛争に対して、画面の中の出来事と自分がいる現実との間にどこか距離感を感じていたことに気付かされたのです。原爆資料館での展示や被爆者の証言、長崎の地に残る遺構に触れ、戦争の凄惨な事実が生々しい現実として迫ってきました。特に印象

的だったのは、式典前日に訪れた爆心地公園です。案内のタクシー運転手さんの提案で原爆落下中心地の石碑前に整列して全員で合掌した後、運転手さんが「もしも原爆投下の日の長崎市上空が晴れていて、原爆投下目標が長崎市中心地から松川町に変更されていなければ自分は生まれていなかった」と少し涙ぐみながら語られた言葉に、戦争が過去の話ではなく、いま私たちが生きる現在と地続きの現実であることを強く実感いたしました。

同行した3名の平和大使の皆さんが、終始真剣な眼差しで見学に臨む姿も大変印象的でした。原爆資料館で熱心にメモを取りながら被爆者の証言に耳を傾ける姿や、平和祈念式典において鈴木市長による長崎平和宣言や被爆者代表による「平和への誓い」に熱心に聞き入る表情からも、その言葉一つ一つを真摯に受け止めていることがわかりました。悲しい歴史的真実を心に深く刻み、それぞれが平和への思いを新たにしていることが、傍で見ていても十分に伝わってまいりました。

最後に、七飯町平和大使としての役目を立派に果たされた3名の中学生に心からの敬意を表します。彼らの学びを少しでもサポートできたなら自分にとっては望外の喜びです。

【レポート】

「平和大使」で学んだこと

大中山中学校　3年　杉　田　篤　志

僕は8月8日～10日までの3日間、「平和大使」として長崎県に派遣されました。

一日目は、平和公園、爆心地公園、原爆資料館を見学しました。その中で僕が一番心に残っているのは原爆資料館です。資料館には原子爆弾が落とされた 11 時2分で止まってしまった時計や、熱風によりくっついてしまったガラス瓶、爆風をあびた人の服などが展示されており、また、被爆された人々のインタビュー映像などを聞くことができました。それは想像していたものよりとても残酷で酷く、僕は言葉が出ませんでした。

二日目は、「長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典」に参列し、犠牲となった方々のご冥福を祈りました。「喉が乾いてたまりませんでした。水にはあぶらのようなものが一面に浮いていました。どうしても水が欲しくてとうとうあぶらの浮いたまま飲みました。」式場となった平和公園の噴水の前にあった石碑です。僕は、テレビや映画でしか戦争を知りません。しかし、今回、原爆資料館などの研修から、どれほどの人々が犠牲となり、また今もなお、後遺症に苦しんでいる人々が数多くいる事を知りました。僕たちと同じ年頃の人々が出征する。どんな気持ちだったのか、それを見送る家族はどう思ったのか、それを考えると悲しい気持ちになります。

今も世界の何処かで戦争が起きています。なんのために戦争するのでしょうか？　戦争は何も新しく何かを作り出すのではなくすべてを奪うものだと思います。戦争は絶対にあ

ってはならないものです。

平和な日常は決して当たり前のもの事ではありません。僕たちにできることは「相手の気持になり行動すること。」、「人を傷つけない」、「寄り添う。」など小さな事かもしれませんが、その積み重ねが平和に繋がる一歩だと思います。

戦後 81 年となります戦争体験者が少なくなった今、唯一の被爆国である日本に生まれた僕には長崎での研修で学んだ事を語り部となって風化させず、戦争を知らない人々に伝えていかなければいけないと思いました。

【レポート】

「 もう二度と起きてはいけない恐ろしい出来事 」

七飯中学校 3年 三小田 瑠 杏

私は、平和大使派遣事業への応募を決めるまで、正直なところ戦争や原爆に対する印象は「よくわからないけど怖い」という印象でした。しかし、実際に長崎を訪れ、自分の目で見て学ぶことでその印象は大きく変わりました。

長崎では平和公園、平和祈念像、原爆資料館を訪れました。平和祈念像は原爆投下から 10 年後の昭和 30 年にできたそうです。ですが、像ができた当時は像よりも復興や被爆者に向けた支援を求める声が多かったそうです。平和公園で印象に残っているのは地層です。原爆投下の時にできた茶碗などの日常生活で使うものが地層となりそのまま残されていました。

原爆資料館で印象に残っているのは原爆投下時間の 11 時2分でぴったり止まっている当時の時計と実際に着ていたボロボロに穴が空いた当時の衣服です。衣服の穴は爆風によって飛ばされたガラスの破片などが刺さってできたものだそうです。

この3つを見て、私は一瞬にして当たり前だった日常と命が奪われたことを実感しました。事前調べで第一目標の小倉が視界不良だったということは知っていました。そして原爆資料館で長崎も視界不良で帰還を検討していた時にできた一瞬の雲の切れ目に投下されたことを知りました。なぜそんな一瞬の判断で多くの命を奪う原爆を落とせたのか不思議でたまりません。

そして、原爆や戦争についてたくさんのことを学んでから長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典に参列しました。この式典では被爆者や被爆者遺族、長崎市長などたくさんの方々の言葉をききました。特に、長崎市長の感情のこもった長崎平和宣言の「核兵器は必要悪ではなく絶対悪であり、人類と核兵器は決して共存できない」という言葉が印象に残っています。自身が被爆二世である長崎市長の言葉から「長崎を最後の被爆地に」という強い気持ちを感じました。

平和大使派遣事業に参加し、私の戦争に対する印象は「もう二度と起きてはいけない恐ろしい出来事」という印象に変わりました。世界が戦争に支配され、人の命が軽視され何が正しいのかを冷静に判断することすら難しくなってしまっていたと感じました。戦争や原爆の世界を変えてしまう恐ろしさや日常生活を送れていることがありがたいことであり、当たり前ではないということを学びました。私が実際に自分の目で見て、耳で聞いて、学んだことを家庭や学校などで様々な方法で積極的に発信していきます。

【レポート】

「　平　和　の　た　め　に　」

大沼岳陽学校　9年　土　屋　郁　乃

私は平和大使として長崎を訪問し、そこで実際に目で見たものや聞いたお話から、たくさんのことを学びました。

原爆資料館には、想像以上に原爆投下直後の実際の写真や映像が展示されていました。街の人の苦しむ表情や壊れた景色がリアルに刻まれていて、見るたびに心が苦しくなりました。

私が1番強く心を動かされたのは、被爆者の方の当時の気持ちが鮮明に伝わってくる絵や日記、証言です。絵には傷ついた人や動物がたくさん描かれているものや、中には紙一面が赤黒く塗りつぶされた絵もありました。きっと、その光景は一生心から離れない強烈なものだったのだと思います。そして、証言には兄弟を失った人、お母さんを失った人、家族全員を失った人、生きていても水が飲めず苦しんだ人など、痛みを感じる体験がたくさん書かれていました。同じ原爆を経験した人でも、それぞれが感じた苦しさは違い、「被爆者」という一つの言葉で捉えてしまっていたけれど、原爆が落とされる寸前まで一人ひとりに大切な日常があったのだと強く感じました。

そして平和祈念式典では、実際に原爆を体験した方の「平和への誓い」を直接聞くことができました。私は、その中で「国々の指導者の方々には、毎日の暮らしに喘ぐ人々の姿が目に入らないのでしょうか。幼い子が泣きながら裸足で彷徨う姿が見えな

いのでしょうか。」という言葉にとても共感しました。これは私自身も思っていたことだったからです。資料館で遺されたものを見て、一人ひとりに大切な暮らしがあったことを感じたからこそ、国の指導者たちが決めた戦争によって街で暮らす人々が苦しみ、日常が奪われるという理不尽さに、国の指導者の方々には何が見えているのか、という疑問をもっていました。実際に被爆者の方からその言葉を聞いたことで疑問は強くなり、改めて考えるきっかけとなりました。

平和宣言や歌などからは、沢山の人の平和を願う思いや二度と同じ過ちを繰り返してはいけないと強く訴える思いが伝わってきました。この81年の間、繋いできてくれた大切な思いを、私たちがしっかりと受け継ぎ、まずは学校や地域など、身近な所から小さな平和を作っていきたいです。

戦うのではなく話合うこと、互いに尊重し合うことで、いつか世界に平和が訪れることを信じ、これからも学んだことを伝え続けます。

参　考　資　料

・七飯町平和大使のあゆみ

・平和祈念祭　「平和への誓い」

・長崎平和宣言

七飯町平和大使のあゆみ

月　　日	時　　間	内　　容
７月２９日（水）	１４：００	「七飯町平和大使」結団式 （場所：七飯町役場庁舎２０１会議室） ・七飯町平和大使に任命（任命状伝達） ・七飯町平和大使の抱負発表 ・七飯町平和大使への激励
８月８日（土）	７：００ ８：００ ９：２５ １０：４０ １２：３０ １６：１５	函館空港着 〃　発（ANA552 便） 羽田空港着 〃　発（ANA663 便） 長崎空港着 長崎市内研修（平和公園/平和祈念像･原爆資料館） ホテル着
８月９日（日）	９：３０ １０：００ １０：３０ １０：４５ １１：４５ １２：３０ １６：３０ １７：００ ２１：００	ホテル発 式典会場着 平和祈念式典参列 平和祈念式典開式 〃　閉式 長崎市内研修 （オランダ坂、大浦天主堂、グラバー庭園、眼鏡橋） 長崎ハウステンボス着 〃　見学 見学終了（ハウステンボス内ホテルに戻る）
８月１０日（月）	１０：００ １１：００ １３：２５ １５：１５ １７：００ １８：３０	ホテル発 長崎空港着 〃　発（ANA666 便） 羽田空港着 〃　発（ANA557 便） 函館空港着
８月１５日（土）	１０：００	七飯町平和祈念祭 （場所：七重小グラウンド横平和祈念之碑前） ・七飯町平和大使による「平和への誓い」

7月 29 日 「七飯町平和大使」結団式

8月9日　平和祈念像前

8月9日　平和祈念式典会場

8月 15 日　七飯町平和祈念祭「平和への誓い」

平和祈念祭　「 平和への誓い 」

いつかは訪れる、 戦争経験者のいない世界。

同じ過ちを繰り返さないために、多くの人が真実を知る必要があります。

私たち3人は、8月9日、長崎市の平和公園で執り行われた「長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典」に、七飯町の平和大使として参列し、恒久の平和を誓うとともに、犠牲となられた方々のご冥福を祈りました。

また、町民の皆様から託された折鶴を平和祈念式典会場に奉納し、戦争を繰り返さないことを誓うとともに、真の世界平和の実現を心に込め、お祈りしてきました。

式典では、新たに死亡が確認された方々の被爆者名簿の奉納や、長崎市内5ケ所から採水された水の献水や多くのご遺族や市民による献花が行われ、そして原爆投下時刻の 11 時2分に合わせ、参列者全員による黙とうが行われました。

その後の、鈴木長崎市長による、平和宣言について、一部を紹介します。

『1945 年8月9日、米軍機が投下した一発の原子爆弾は一瞬にして長崎のまちを破壊し、その年の終わりまでに人口の3分の2にあたる 15 万もの人々が死傷しました。

今、地球上に存在する核弾頭は、1万2千発以上。なぜ、これほど残酷な兵器に固執する国があるのでしょうか。国際社会に蔓延する相互不信と対立・分断を背景に、大国の「力による支配」が横行しています。核保有国が当事者となったウクライナや中東の紛争も未だ予断を許さない状況です。さらには、核兵器の近代化や増強など、核軍縮に逆行する動きが加速しています。こうして、相互不信と対立・分断を一層深刻化させる悪循環に陥っているのです。

核兵器に依存する国は、核兵器を実際に使用しなくても、保有することで他国に攻撃を思いとどまらせることができるという「核抑止論」を主張します。しかし、戦争という極限状況の中で自国の存亡を懸けた究極の判断を迫られたとき、それでもなお「核のボタン」を押さないと、誰が言い切れるのでしょうか。広島・長崎への原爆投下は、人間が人間

への核兵器使用という一線すら 越えてしまう現実を突きつけました。核抑止論は、極めて危うい。核兵器は「必要悪」ではなく「絶対悪」であり、人類と核兵器は決して共存できない、と。

一つの地球に暮らす「地球市民」の皆さん。 平和な世界をつくるために、私たちにはできることがあります。相手の立場や苦しみに心を寄せ、分かり合おうと努力することは、対立や衝突を避けるための大事な一歩となります。 それが人と人、国と国、それぞれの場面で信頼を育み友好関係を築く礎になるのです。

「長崎を最後の被爆地に」 この誓いを永遠の事実とするために、長崎は世界中の平和を求める人々と連帯し、核兵器廃絶と世界恒久平和の実現に 向けて、決してあきらめず歩み続けていく。』と力強く呼びかけました。核兵器の廃絶と、世界が目指すべき平和な未来を示した宣言でした。

今回、原爆資料館などでの研修から、81 年前に投下された原子爆弾が、一瞬にして多くの命を奪い、街並みや人々の未来を一変させたことを知りました。その犠牲者の中には私たちと、全くの同世代のたくさんの学生がいた事に、大変な衝撃を受けました。多くの未来・可能性を一瞬に奪われたその無念さは、図り知れません。

世界では、今もどこかで戦争が起きています。81 年前と同じように、生きたくても生きられなかった人たちや、明日を共に過ごすはずだった大切な人を失い、生きることに絶望している人たちが、この世界のどこかにいるのです。願うだけでは、平和は訪れません。色鮮やかな日常を守り、平和をつくっていくのは私たちです。

「 自分の思いを伝える前に、相手の気持ちを考えること 」

「 友だちの良いところを見つけること 」

「 みんなの笑顔のために自分の力を使うこと 」

ほんの少しの行動ですが、 誰にでもできる平和への一歩です。

終戦から80年以上が経ち、本当は辛くて、思い出したくない記憶を伝えて下さる戦争経験者の方々から、直接お話を聞く機会は少なくなっています。

どんなに時が流れても、あの悲劇を風化させないために、私たち「七飯町平和大使」は、戦争の惨さや核兵器の恐ろしさを、世界の人々に訴え、犠牲者の無念を伝え続けます。

夢と希望にあふれた幸せな未来をつくるために、一人ひとりが力を合わせて行動し、あの恐ろしい戦争や、核兵器の使用を繰り返えさせないことをここに誓い、そして、誰もが平和だと思える未来を、私たちがつくっていきます。

令和8年8月15日　七飯町平和大使
大中山中学校　　杉　田　篤　志
七飯中学校　　三小田　瑠　杏
大沼岳陽学校　　土　屋　郁　乃

「 長崎平和宣言 」

1945年８月９日、米軍機が投下した一発の原子爆弾は一瞬にして長崎のまちを破壊し、その年の終わりまでに人口の３分の２にあたる15万人もの人々が死傷しました。

13歳で被爆した故・吉田勝二さんは、地獄のような惨状をこう語っています。

> 爆心地の方に向かうと黒焦げで炭化した人、目が飛び出ている人、内臓が飛び出した人、手足がない人たちが右往左往していた。浦上川にたどり着くと、ここも焼けただれた多くの人が、油と血と汚れた水、その水を飲みながら次々に亡くなっていった。私は、全身血だらけ、皮膚は剥がれ体の下の方にだらりとぶら下がっていた。顔も皮膚は付いていたものの、どす黒く焼け焦げていた。

吉田さんの顔には生涯消えることのない大きな火傷の痕が残り、周囲からの視線に苦しみ続けました。辛うじて死を免れた人々も、心身に深い傷を負い、放射線の影響でがんなどが発症することへの不安と恐怖を一生抱え続けています。

今、地球上に存在する核弾頭は、１万２千発以上。

なぜ、これほど残酷な兵器に固執する国があるのでしょうか。

国際社会に蔓延する相互不信と対立・分断を背景に、大国の「力による支配」が横行しています。核保有国が当事者となったウクライナや中東の紛争も未だ予断を許さない状況です。さらには、核兵器の近代化や増強など、核軍縮に逆行する動きが加速しています。こうして、相互不信と対立・分断を一層深刻化させる悪循環に陥っているのです。

これは、核兵器不拡散条約（ＮＰＴ）再検討会議が核軍縮に向けた成果文書を３回連続で採択できなかったことでも浮き彫りになっています。

核兵器に依存する国は、核兵器を実際に使用しなくても、保有することで他国に攻撃を思いとどまらせることができるという「核抑止論」を主張します。しかし、戦争という極限状況の中で自国の存亡を懸けた究極の判断を迫られたとき、それでもなお「核のボタン」を押さないと、誰が言い

切れるでしょうか。
広島・長崎への原爆投下は、人間が人間への核兵器使用という一線すら越えてしまう現実を突きつけました。
人間の命も尊厳も木っ端微塵に破壊する核兵器の威力を身をもって知る被爆者や被爆地は、その体験から確信をもって訴えます。
核抑止論は、極めて危うい。核兵器は「必要悪」ではなく「絶対悪」であり、人類と核兵器は決して共存できない、と。

一つの地球に暮らす「地球市民」の皆さん。平和な世界をつくるために、私たちにはできることがあります。
「平和の原点は、人間の痛みがわかる心を持つこと。」
これは吉田さんが被爆体験を語るとき、いつも伝えていた言葉です。
相手の立場や苦しみに心を寄せ、分かり合おうと努力することは、対立や衝突を避けるための大事な一歩となります。それが人と人、国と国、それぞれの場面で信頼を育み友好関係を築く礎になるのです。
吉田さんの言葉を心に刻み、行動につなげていきましょう。

すべての国の指導者の皆さん。国連憲章の理念に基づく多国間主義と「法の支配」を早急に取り戻してください。人間の尊厳と基本的人権を守り、国際協調を通じて恒久平和と人類共通の繁栄を実現するという国連創設時の精神に立ち返ってください。
核保有国と核抑止力に依存する国の指導者の皆さん。核抑止力に頼れば頼るほど、核戦争の危険もまた高まる現実を直視すべきです。ＮＰＴの義務を履行し、核軍縮に向け着実に前進することを強く求めます。
とりわけ日本政府は、今年初めて開催される核兵器禁止条約再検討会議に参加し、唯一の戦争被爆国としての歴史的使命を全うすべきです。不戦の決意が込められた日本国憲法の平和の理念と非核三原則を堅持し、国際社会の緊張緩和と軍縮に向けた外交を強化してください。北東アジア非核兵器地帯の実現などを通じて、核兵器に頼らない安全保障政策への転換を求めます。
さらに、平均年齢が86歳を超えた被爆者への援護の充実と、未だ被爆者と認められていない被爆体験者の一刻も早い救済を強く要請します。

原子爆弾で亡くなられた方々とすべての戦争犠牲者に、心から哀悼の誠を捧げます。

被爆者の声を直接聞くことのできる今だからこそ、未来に向けて被爆の記憶と被爆者の思いをしっかりと受け継いでいきます。

「長崎を最後の被爆地に」。この誓いを永遠の事実とするために、長崎は世界中の平和を求める人々と連帯し、核兵器廃絶と世界恒久平和の実現に向けて、決してあきらめず歩み続けていくことをここに宣言します。

２０２６年（令和８年）８月９日

長崎市長　　鈴木　史朗